

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 金 慶允
論文題目 矢内原忠雄のキリスト教思想と朝鮮
論文審査委員 鵜飼 哲教授、イ・ヨンスク教授、糟谷 啓介教授

1 本論文の構成

本論文は日本人キリスト者であり植民地政策学者でもあった矢内原忠雄（1893-1961）の、日本の植民地支配下の朝鮮および朝鮮人キリスト者とのかかわりを、彼のキリスト教思想および聖書解釈との関連で研究するとともに、朝鮮における彼の主要な弟子の一人であった金教臣がその思想を、朝鮮の歴史的状況と向き合うなかでいかに受容しかつ変容していったかを解明しようとするものである。

本論文は次の各章から構成される。

第一章 序論

- 1) 問題意識
- 2) 先行研究について

第二章 日本的キリスト教と朝鮮産キリスト教

- 1 朝鮮のプロテスタント教会の成立
 - 1) 神学をめぐる論争
 - 2) 信仰形態としての復興会
- 2 日本・朝鮮キリスト教関係史略述
- 3 日本のキリスト教
- 4 朝鮮における日本的キリスト教
- 5 朝鮮産キリスト教の諸相
 - 1) 「朝鮮基督教会」の創立
 - 2) 「基督教朝鮮福音教会」
 - 3) 積極的信仰団

第三章 無教会主義のキリスト教論

- 1 内村鑑三の日本的キリスト教
 - 1) 日本のキリスト教
 - 2) 内村鑑三における武士道
- 2 矢内原忠雄におけるキリスト教の日本化問題
- 3 金教臣の朝鮮産キリスト教
 - 1) 金教臣と「聖書朝鮮」

- 2) 金教臣と内村鑑三
- 3) 十字架と苦難
- 4) 復活-信仰と現実に対する希望

第四章 矢内原忠雄と朝鮮

- 1 ロマ書講義
 - 1) 個人の救いと民族の救い - ロマ書十一章の問い
 - 2) 「救いの奥義」をめぐって
- 2 エレミヤ理解
 - 1) 或る朝鮮人女学生との対話
- 3 植民地文明化作用
 - 1) 矢内原忠雄の植民地政策論の評価と民族論
 - 2) 植民地の教化

第五章 矢内原忠雄と国家

- 1 国家の権威 - ロマ書十三章をめぐって
- 2 理想の国家と神の国 - 矢内原忠雄と天皇制問題
- 3 神の国
- 4 預言者と愛国者
- 5 宗教改革としての無教会主義

第六章 総括と展望 - キリスト教と民族主義的主体形成に関して

附録 (矢内原忠雄略歴)

参考文献

2 本論文の概要

第一章「序論」の「問題意識」の項で明確に述べられているように、本論文における著者の研究の出発点は、植民地支配下の朝鮮に対する矢内原忠雄のかかわりに一面的に肯定的な評価を与えるこれまでの通説に対する懐疑であり、また、これらの通説において矢内原のキリスト教思想が問われていないことに対する批判である。したがって、矢内原が朝鮮との関連で行った聖書解釈を歴史的コンテクストに置き直して検討することが、本論文における著者の主要な作業となる。

その作業に先だって、第二章では、朝鮮におけるキリスト教プロテスタンティズムの歴史がたどられる。1885年李朝朝鮮に西洋人宣教師が来訪して以後、主として長老派とメソジスト派が宣教区を分担しつつ布教を進めていった。朝鮮のプロテスタント教会は米国諸派の影響を受けつつも、各教会の自給自足と財政的独立を旨とするネヴィウス法を採用したため、信者との親密な関係の上に自立した組織を築いていった。日韓併合を経て1930年代以後、日本に留学し神学を修めた人々が活躍し始め、同時に日本統治下で西洋人宣教師の布教活動が不可能になりその多くが帰国するなかで、朝鮮におけるキリスト教プロテスタント諸派の主要な潮流が確立していく。それは大別すると、「平壤神学校」を中心とした保守的な韓国神学系、自由主義神学の影響を受

けた日本留学系、どちらかといえば保守的なアメリカ留学系に分かれる。

日本教会の朝鮮伝道は、日本基督教会が1903年に朝鮮伝道開始を決議した時点から開始された。当初、朝鮮総督府の援助を受けた布教活動が行われたが、1919年の三・一独立運動に多くのキリスト者が参加し、教会に対する苛酷な弾圧が行われ、布教は失敗に終わる。1931年の満州事変以後植民地統治はいっそう強圧的になり、とりわけ1937年に「皇国臣民の誓詞」が制定されると「内鮮一体」の教会合同路線が押し進められ、1938年には朝鮮長老教会も「神社参拝」を受け入れるに至った。しかし、このような同化主義に与せず、個としての抵抗を貫いたキリスト者も少なくなかった。

以上の歴史的展望を踏まえつつ、著者は、日本と朝鮮の近代のキリスト教受容における民族問題の位相の違いに注目する。「日本的キリスト教」の模索は、最終的には30年代の天皇制全体主義国家による宗教統制への屈服に帰着するが、キリスト教の「日本化」という課題は、より以前から、より広い意味で、外来の宗教としてのキリスト教と「日本的」とされる伝統との結合の志向として様々な思想的模索がなされていた。そして、そのような志向をもった日本人キリスト者による朝鮮伝道には、海老名弾正に典型的に見られるように、日本化されたキリスト教の朝鮮への移植、すなわち、そのようなキリスト教を通しての朝鮮民族の日本民族への同化の要求が含まれていた。

一方、朝鮮においては、三・一独立運動後の情勢の変化のなかで、社会主義や近代主義の立場からのキリスト教批判が盛んになり、それに対してキリスト教の側からは「朝鮮的キリスト教の定立」「朝鮮キリスト教の土着化」が課題として謳われるようになる。この課題は民族独立の要求と不可避的に結びつき、そのなかで、「日本的キリスト教」に対する「朝鮮産キリスト教」の探求が、しかし、しばしば類似した思想傾向、聖書解釈にもとづいてなされていくことになる。

以上の錯綜した歴史的＝思想的コンテクストのなかで、著者は、日本で生まれた無教会主義が、朝鮮において果たした思想的役割の検討を行っていく。第三章では、まず、無教会主義自体の思想的検討が課題とされる。矢内原忠雄の師であり無教会主義の提唱者であった内村鑑三にとって、「イエス」(Jesus)と「日本」(Japan)を「二つのJ」として同時に愛そうとする彼の立場からも明らかなように、日露戦争時の反戦の立場と「愛国心」は矛盾するものではなかった。外国人の仲介を経ずに、日本人が日本人の魂を通して神から直接に受けるキリスト教という内村の思想のうちに、著者は、民族意識とキリスト教本来の魂や霊の概念の混同にもとづく民族主義的傾向を識別し、この傾向は内村による武士道に対する高い評価にとりわけ顕著に見られることを指摘する。矢内原忠雄のキリスト教思想の検討も、まさにこの「キリスト教の日本化問題」を軸に行われる。著者はひとまずここでは、内村とならんで矢内原のもう一人の師である藤井武の歴史理解を参照しつつ、矢内原が旧約聖書におけるユダヤ民族と日本民族を同一視していた点に着目する。日本の伝統を「旧約」になぞらえ、そのうえに「日本的キリスト教」としての無教会主義が「新約」として位置づけられる。ここに、矢内原が天皇を含む日本的とされる「伝統」に固執し続けた神学上の必然があったと著者は指摘する。

それでは、このような矢内原のキリスト教理解は、朝鮮人キリスト者の側からはどのように受け止められたのか。日本留学中に内村を師としその「聖書研究会」に参加した金教臣は、1927

年に創刊された雑誌『聖書朝鮮』の主要な編集者であり、朝鮮における無教会主義の代表的な思想家である。金教臣の思想は、著者によると、以下の3点にまとめられる。第一は聖餐や洗礼など教会による典礼の否定である。第二は各人が聖書研究を通じて直接神と結ぶ関係の重視である。第三は、歴史を「神の摂理」ととらえ、この摂理において各民族に固有の使命が与えられるという確信である。『聖書朝鮮』の寄稿者であったもう一人のキリスト教思想家咸錫憲は、イエスの時代のガリラヤと当時の朝鮮を汚く蔑まれた場所として同一視し、そのような場所にこそキリスト教の救いが求められると考えた。著者の考えでは、全宇宙の痛み、苦悩を背負うことをもって朝鮮民族の使命とする咸錫憲の思想を、金教臣は、あらゆる教会制度の外部で「自我を十字架につける」ことをもってキリスト者の使命とする自分の思想と本質的に同じであると考えていた。ただし著者は、金教臣の場合、自我および理性への期待が大きかったがために、自我を神に譲渡するまで信仰に賭けることができず、行為の強調、現実変革へのやみがない志向が見られるとする。ここにはとりもなおさず、無教会主義の立場から歴史にかかわろうとする主体が必然的に抱え込まざるをえない矛盾が観察されるが、それが朝鮮人キリスト者の場合には、自己と朝鮮という、二つの「自我」の克服による個人と普遍の出会いの追求として現れたのである。

第四章では、このような朝鮮人キリスト者の尊敬を集めたとされる矢内原忠雄のキリスト教思想が検討される。金教臣が矢内原から受けた神学上の影響は、まず第一に、パウロのロマ書十一章の解釈にかかわっていた。ここでパウロは異邦人キリスト者がユダヤ教の律法に従うべきか否かという問題に応え、律法を介さずに信仰のみにもとづく義を主張した。矢内原によれば「救いにおける民族の力学」と呼ぶべきものがあり、それによれば、イエスの宣教ののちユダヤ人が神に不従順になったため異邦人が神の憐憫を受け、福音が異邦人に伝えられることで今度は逆にユダヤ人が励まされ神の懐に帰ることになる。矢内原はロマ書のこのような解釈にもとづいて同時代の歴史の弁証を試み、「英米民族の不順」が「日本民族」に「救い」をもたらし、それを契機に「英米民族」もやがて「救い」に還帰すると考えた。著者は、パウロの思想の矢内原によるこのような解釈は、「神の恵み」よりも「民族」に力点を置きすぎた点で誤りであるとして、ロマ書同箇所のカルヴァンによる解釈との比較を通してこの民族主義的偏りを分析する。そして、矢内原が「救い」を民族の次元でとらえ、民族の神への不従順ゆえの苦難が「救い」の前提とされていることに問題点を絞り込む。なぜならば、この矢内原の解釈が朝鮮民族に適用されたとき、東洋の「選民」である日本が誤った仕方で東洋を支配しようとした結果いまや「異邦人」としての朝鮮と中国に神の「救い」が及ぶという解釈が生まれ、金教臣などの無教会派朝鮮人キリスト者の思想と朝鮮民族主義の間に、ある分ちがたい絆が結ばれることになるからである。

矢内原自身は、植民地支配下の朝鮮民族の状況もまた、旧約時代のユダヤ民族との類比を通して考察していた。そのことは、1937年に津田英学塾卒業礼拝後、朝鮮人女学生の問いに応えた「或る朝鮮人女学生との対話」における聖書「エレミア書」の解釈に端的に見られる。そこでは、バビロニア捕囚をユダヤ人に対する神の罰とするエレミアの預言を朝鮮の現状に適用し、日本による植民地支配を「神の摂理」とみて、支配者に対する「反抗的な」「軽挙盲動」を戒め、朝鮮人の「悔い改め」の必要が説かれている。そして、朝鮮の解放もまた「神の摂理」に待つべきことが主張されている。

矢内原のこのような聖書解釈およびそれにもとづく歴史の弁証は、著者によれば、彼の植民地政策論と深い連関をもっている。浅田喬『日本植民地研究史論』に主として依拠しながら、著者は、矢内原植民地論の問題点を、朝鮮総督府の専制と同化主義政策に対する批判、朝鮮人の参政権、朝鮮議会の設置の要求については評価しつつも、天皇制批判の致命的な欠落のために、その自治論が責任内閣制の要求に行き着かなかった点に求めている。矢内原は民族を自然的実体ではなく文化的、歴史的所産とみなしており、民族をその自覚における精神性に即して理解し、「民族精神と世界文化の弁証法的結合」を進歩的民族主義の基準と考えていた。その点から、植民地宗主国の言語の強要などの文化的同化政策を批判し、「宗教的信念の伝達」による「内心に於ける融和」を目標とした。

第五章で著者は、矢内原の国家観とそのキリスト教思想の関連を考察する。そこで主に問題とされるのがロマ書十三章の解釈である。この章は一般に、世俗の政治的権威へのキリスト者の服従を信仰から根拠づけるものと考えられてきた。しかし、著者は宮田光雄『国家と宗教』などを参照しつつ、ここでパウロが「権威」と呼ぶものが国家制度そのものではなく、「個々の行政担当者」を示す用語であったことを根拠にこの解釈の伝統を疑問に付す。矢内原はこの箇所をおおむねこの伝統に従って解釈し、「利己的追従」と「良心的服従」を区別しつつ、「服従の霊的幸福」を語っており、この立場は日本人の日本国家に対する態度ばかりでなく、朝鮮人の植民地権力に対する態度にも妥当すると考えていた。著者は矢内原のこのような思想を、ミルトンによる別様のロマ書解釈と対照しつつ、キリスト者の自由よりも服従を重んじる点で批判する。この服従の義務の強調は、矢内原が、キリスト者が戦争などみずから罪と考える行為を義務として果たすことをイエスにならって十字架を背負うことになぞらえるに及んで、そのもっとも倒錯的な側面をあらわにする。そして著者は、矢内原による天皇制の肯定は、「アブラハムに対してエホバ神が与えた約束に類比しうる「約束」が、「天照大御神」と「天孫」の間にも交わされた」と断定して日本民族とユダヤ民族を「選民」として同一視する、「誤った聖書理解」にもとづくものであるとする。

矢内原はイエスを「真の愛国者」と考え、「心の転換」による真の「神の国」の市民となることがキリスト者のつとめであるにとらえ、その社会批判を、「心の転換」を呼びかける「預言者」的活動として実践した。著者はこのような矢内原の思想をカール・バルトの「危機神学」と比較しつつ、歴史における神と人間の再統合という理念に両者の共通性を求める。しかし、矢内原にとって「預言者」と「愛国者」が同義となる点に、両者の決定的な分岐点を位置づける。

内村鑑三は無教会主義を第二の宗教改革と考え、プロテスタンティズムの必然的な帰結とみなしていた。矢内原忠雄はさらに、ルターによる宗教改革がドイツ民族を覚醒に導いたように、内村による無教会主義が日本民族を覚醒に導くものととらえ、無教会主義を日本的キリスト教の主張に結びつけた。しかし著者は、ドイツの場合、民族主義は宗教改革から派生した問題でありその中心的内容ではなかったとし、ここでもまた、矢内原のキリスト教思想の民族主義的偏りを指摘するのである。

以上の検討を踏まえた上で、第六章で著者は、朝鮮におけるキリスト教と民族主義のかかわりについて総括的な考察を行う。朝鮮は西洋列強ではなく日本の植民地支配を受けたため、朝鮮の

民族主義は「反日」として親西洋、親キリスト教の傾向を持ち、そのためキリスト教と民族主義は不可分の関係にあった。また、朝鮮のキリスト教は宗教的信仰としてだけでなく、文明化、近代化、民族独立に向けた実践思想という側面を強くもった。しかし、キリスト教の本来の教義は、神の前での万人の平等を肯定する点で民族主義とは両立不可能であると著者は考える。無教会派が「日本的キリスト教」を志向しつつ育んだキリスト教思想が朝鮮においては「朝鮮産キリスト教」の主張を生み出したが、この思想的遺産にはらまれてきた民族主義の批判的再検討もまた、聖書から歴史と社会を解釈しようとする傾向を克服した、新たなキリスト教の思想と実践の模索に求められることを示唆して著者は論を結ぶ。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、植民地朝鮮に対する共感として一般に肯定的に評価されてきた矢内原忠雄の思想を歴史的コンテクストに即して検討し、彼のキリスト教思想と植民地政策論の関連を分析して、これまでの通説に多くの正確な批判を加えたことである。とりわけ聖書解釈が彼の歴史観、民族観、国家観との間に緊密な関連を持つことを詳細に証明したことは画期的であったと考えられる。

第二に、このような矢内原の思想が朝鮮人キリスト者によってどのように受容され、また変容されていったのかを、金教臣の思想に即して多面的に描き出したことが挙げられる。とりわけ日本的キリスト教としての無教会主義が朝鮮におけるキリスト教思想と民族主義思想の複合的発展に与えたインパクトを、その複雑な構造に即して解明した意義は大きい。

第三に、矢内原のキリスト教思想を、主にロマ書の解釈に即してカルヴァン、ミルトン、バルトなどの思想と対照し、その民族主義的傾向を浮き彫りにするとともに、民族主義と融合することのないキリスト教思想の可能性を、朝鮮の歴史的経験に即して提示した点が挙げられる。ここには、過去の事例の研究を通してありうべき将来を展望する、著者の明確な学問的姿勢がよく現れている。

とはいえ、本論文にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、植民地支配下の朝鮮民族とキリスト教のかかわりには、プロテスタンティズムばかりでなく、カトリシズムとの深い出会いも存在したにもかかわらず、あたかもプロテスタンティズム、なかでも無教会派の思想がこの歴史的経験にとって決定的な重要性を有していたかのような論の立て方になっており、この点で大きな誤解が生じうる点が挙げられる。

また、そのことと関連して第二に、民族の苦難を十字架上の試練ととらえる一方で福音の歓喜としての側面が捨象され、パウロのロマ書に過度の重要性が付与される反面でイエス論はむしろ希薄であり、キリスト教思想の大きな部分に光が当てられていない点が挙げられる。

そして第三に、タイトルから想像される本論文の、矢内原思想の個別研究的側面と、本論文の随所に見られる、それ自体は意義深い朝鮮と日本、日本とドイツなど、キリスト教と民族主義の関係の比較論的側面とがやや雑然と併置されている憾みがあり、両者の有機的連関が把握しづらい点が挙げられる。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにはかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2007年7月11日

受験者 金慶允
最終試験委員 鶴飼哲 イ・ヨンスク 糟谷啓介

2007年6月20日、学位請求論文提出者 金慶允氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「矢内原忠雄のキリスト教思想と朝鮮」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、金慶允氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、金慶允氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。